

## 『自由・自律の精神』を育てる学校づくりを目指そう

日本個性化教育学会 会長 加藤幸次

一般的に、研究会の寿命は 30 年と言われています。研究会を構成する人々の活躍や研究会が目指す目標は「一世代」といったところでしょうか。しかし、私たちの学会は、かれこれ、50 年にもなるのです。しかも、このところ、再び、新しい展開を始めているのです。このこと自体、素晴らしいことですし、私たちの研究会が目指す目標が、まさに、根源的、本質的ということではないでしょうか。

1984 年に「全国個別化教育連盟」として、板橋区の金沢小学校で大会を開き、この研究会は発足しました。当時、全国にばらばらと、30 近くの多目的（オープン）スペースをもった小学校が造られたころでした。板橋区はその先端を切り開いた教育委員会でした。同年、文部省が多目的スペースを増設することに補助金を与えることになり、急速に、学校が増えてきました。

この動きは 20 世紀初頭に始まる新教育、すなわち、児童中心主義教育という世界的な視野の中で展開されてきているものです。1968 年に公表されたプラウデン報告書によって広く知られるようになったのですが、多目的スペースを持った学校は戦後のイギリスで作られ、そこでは、形式にとらわれないインフォーマル教育が展開されたのです。直ちに、アメリカに広がり、ヨ

ーロッパ諸国や日本にも、持ち込まれたのです。

日本の「個性化教育」を目指す学校教育改革の出発点を、いわゆる大正自由教育の実践に、あるいは、1941 年に出版された『新教育指針』や、1971 年の『四六答申』に求めることもできるのですが、やはり、1984 年、臨時教育審議会が最終答申で示した「個性の尊重」という方針にあると言っていいでしょう。そこでは、次のように言われています。「従来の教育においては、個人の尊厳、個性の尊重、自主的精神の涵養が必ずしも十分ではなく、個の確立、自由の精神の尊重等に欠けているところがあったことを反省し、これからの教育は、『自由・自律の精神』、すなわち、自ら思考し、判断し、決断し、責任を取ることでできる主体的能力、意欲、態度等を育成しなければならない」と。この答申を受けて、1988 年、私たちの研究会は「全国個性化教育連盟」と改称し、さらに、2008 年、「日本個性化教育学会」とし、研究紀要と研究大会を持つ学会にアップグレードしました。

今後、私たちは活発な学会活動を通して、この崇高な理念を引き継ぎ、「個人の尊厳、個性の尊重、自主的精神の涵養」を目指した学校づくりに励んでいきたいものと希望しています。

講演 1

『令和の日本型学校教育』が  
目指すもの

上智大学教授 奈須正裕

会員の皆様へ質問です。ご自身の学校、ご家族、あるいは周りで、コロナの影響で子供たちの登校が困難となった2年前の新学期を思い出して頂きたいのです。

問い: 児童(生徒)は教師からの指示やプリントが配布されるまで、何をしていましたか

回答選択肢: ①何をしてよいかわからず、学校(先生)からの指示を待っていた ②自分で計画を立てて学習をしていた ③学校(先生)からの指示はないが、自由研究を始めた

コロナ禍という前代未聞の状況では世界中で教育方法や教育の在り方そのものを見直すことを余儀なくされました。これまで、給食や清掃活動で海外から賞賛されてきた全人教育「日本型」の教育を受けてきた私たちは、日本の教育の優れた点とは別に、課題が浮き彫りになりました。

◆授業は、教師が「始めます」

と言って始まるものではない

授業は教師からの指示があって初めて、始まるものであるとされてきました。私たちはコロナ禍で登校が困難となり、子供は指示を待つだけで、自立的に学習を行い、主体的な学びができるように教育がされていなかった事実気づいたともいえます。「皆と同じ、言われたことを言われた通りに行う」型が主流であり、それは日本の学校のみならず、社会の特徴としていじめや生きづらさに関わる要因とも指摘されます。換言すれば、

令和の日本の学校教育は、間違えてはいけない、他人と違うことをしてはいけない「正解主義」と「同調圧力」から脱却することが鍵となります。そのためには、教師の指示で学習を始めるのではなく、子供たちが自分にとって今何をすべきかを考えて行うという学習の在り方に立脚し、アクティブ・ラーナーとして自立的に学ぶ経験を提供する必要があります。

◆全ての子供を

「自立した学習者」に育てるために

子供は、もっと「学ぼう」と思っています。教師の介入なしには授業や学習ができないという状況は、多様なツールを伴う学習環境の整備という点からも GIGA スクール構想で変わりつつあります。ブランソンのモデル(1990)に示されるように、子供が教師の指示や教師のタイミングでなく、自分のタイミングで必要なものにアクセスして学習を進めます。何を学ぶかは教育課程上で定まっていますが、子供がどう学ぶかを自由にすることで、教師は支援に回り、子供と一緒に授業を作るシステムの導入が求められます。

こうした授業ができるのは全体の2割程度です。2割でも子供は変わります。教師は教えるのをやめるのではなく、残りの8割では各単元・教科との関わり、現実世界での経験・知識を繋げる等、子供ができないことを行います。子供を自立した学習者に育てるために、一斉指導の見直しという枠に留まらず、教師が「子離れ」することでそのような教育の実現が可能であるという見通しのもと、「令和の日本型学校教育」の方向性が見えてきます。

(文責・東京・伊藤)

講演 2

「才能教育・2E 教育と  
個別最適な学び・協働的な学び」

関西大学名誉教授 松村暢隆

### 1. 文科省の有識者会議と才能の議論

中央教育審議会答申(令和3年,2021.1)において、「特定分野に特異な才能のある児童生徒に対する指導」の在り方が検討課題となり、「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学び」の実現や、個々の才能を伸ばすための高度な学びの機会の提供等に、ICTの持つ特性を最大限活用することが挙げられた。

IQ130以上を Gifted と呼び、議論もされているが、このような子供たちの中には、2E(才能と発達障害を併せもつ Twice-Exceptional)であったり、突出した才能による困難があったりするため、不登校に陥っている場合もある。

### 2. 才能教育の実情(アメリカ及び日本)

アメリカにおける ESEA(初等中等教育法)の定義(1978)によると、才能(giftedness)とは、知能、創造性、芸術、リーダーシップ、特定の学問のいずれかで並外れて優れた能力や特性を持つこととされる。才能特性の把握も、多様な手段(標準テスト、行動観察、校外での成果等)からとなる。多様な領域固有の才能は、教育課程を超えた指導・支援が必要である。しかし、野球やバスケットボールのスポーツなどは地域で才能を伸ばす機会があり、特別の予算は付かない。一方、才能特性のマイノリティや貧困家庭児が不利にならないよう、才能教育プログラムがある。ただ

#### ◆才能の三輪概念 レンズーリ(J. S. Renzulli) [three-ring conception of giftedness]



(Renzulli, 1995;  
松村, 2021)

★強い興味・熱中も才能の要素!

め、対象者は州や地域によって1%以下から十数%まで大きな幅がある。

最近では、Gifted=「才能児」とラベル付けない傾向もある。才能児ではない子供たちが「非才能児」となってしまう、選抜が公正でないとされるためである。

日本では、「才能教育」という個別の制度はなく、今後も新設しない方向で議論されている。「才能児(Gifted)」を予め特定せず、才能行動・特性を見出し、活かして、指導・支援を通常学級での個別最適・協働的な学びをベースに行う。喫緊の課題としては、学校に不適応な才能児の指導・支援である。

### 3. 学習・社会情緒的困難のある才能児

2021年、初めて文科省が2E児への支援(2Eの存在・困難を認識)の重要性を明文化した。多様な子供たちを誰一人取り残すことのない個別最適な学びの実現は、2E教育実践の出発点である。才能による困難(浮きこぼれ)をインクルーシブに通常学級・通級指導等での個別最適な学びの中で実現すること、才能や困難を教師・SC・保護者が正しく理解すること、子供自らが学び方を選べ

## 実践報告

### 「特別支援教育と個別最適な学び・協働的な学び」

天童市立天童中部小学校 奥山千鶴子 稲田美佐子

この報告は、NHK「ハートネットTV」や書籍などでも紹介された実践報告である。

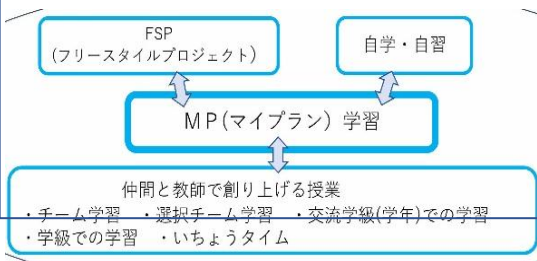
## 自分のくらしを 自分らしく 自分でつくる子ども(人)に

天童中部小では、子どもの力を伸ばすのに通常学級・特別支援学級の区別はないと考え、すべてが特別支援ととらえている。そして「子どもがする(学習者主体の)授業」を目指して「仲間と教師で創り上げる授業」「マイプラン学習(単元内自由進捗学習)」「フリースタイルプロジェクト(個人総合)」「自学・自習」の4つの授業スタイルを実践している。

特別支援学級には35名の子どもと7名の担任がいる(2021年度)。教師一人一人が35人全員の担任という意識で授業を行っている。人数の多さをいかし、学年(学級)ごとの授業以外に、学習内容で分かれる授業、縦割りや35人全員で行う授業、交流学級の授業など、多様な学習・生活集団をつくり取り組んできた。この一年をふり返り「学校においては、子どもの自己肯定感や自信は授業で、信頼と安心は学級経営で培われることがあらためて確認できた」という。

奥山氏は、前年度の3学期からはじめたマイプラン学習を「自分ですること、自分でできたことの面白さに気付くことができる学習」と評している。実践報告では、担任団が何を大切にしながら、どのような学習材や環境の準備をすすめ、授業では子どもの姿をどのように受けとめ、それをどう支援し、子どもの学びと育ちをみつめていっ

たかが、具体的なエピソードで語られた。また、



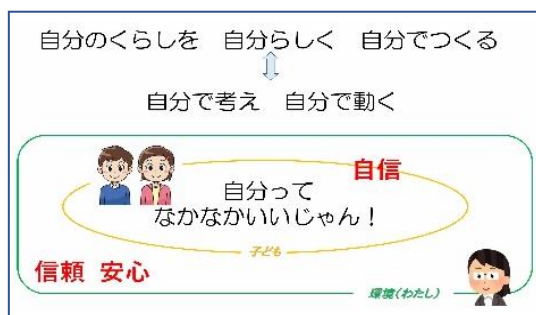
次のような奥山氏の語りは「学習者主体」への深い洞察であり印象的であった。

『『自分のくらしを 自分らしく 自分でつくる』ためには、自分で考えて、自分で動きをつくる力…。誰かに言われて動く、誰かに言われるまで待つのではなく、自分が、自分から、自分でという力が必要です。」「子どもってそもそもすごいんです。自然にできている素敵なことがたくさんあるのに、その姿を見過ごし、できないことを何とかしようと考えていた。」「できないかも、難しいかもと、教師が勝手に思い込み、子ども自身が考えて動く場を設定してこなかったとふり返ります。子どもが今もっているよさや力、これをいかす、のばす学習をつくりたいと考えました。』

奥山氏は、子どもが自分で考え動くためには「考えるための言葉が必要」と指摘する。「言葉を鍛える」ために、普段の会話もふくめ様々な場面で「それで…? だから…?」と意図的に問い返

して、子どもが自分を見つめなおし、言葉をつな げていくことを心がけている。日記を書く活動

## 春季研究会報告「多様性と包摂性を高める学校教育の創造」(オンライン) 2022. 3. 27



も大事で、子どもに合わせてできるところで段階をおって書く支援をして、それを担任も一緒に楽しんでいる。言葉を使って考えることに自信がもてるようになれば、子どもは自分で動きはじめる。「ここまで時間はかかるが子どもの歩みに『おつきあい』する覚悟でいきたい」という。

担任団はマイプラン学習の実践後にふり返りを行っている。そこでは全体的な印象ではなく「〇〇さんの学びはどうだったか」、各自が記録を持ち寄り、複数の目で見付けた子どもの姿や、そこで教師が感じたり考えたことについて話し合い、子どもごとに成果と課題を確認している。

子どもも学習を終えて自分の学びがどうだったか、学級でふり返る時間を設けている。言葉はここでも重要である。子どもが自分を見つめ自分を評価することで、新たな動きをつくっていかうとしているのを担任団は感じているという。

続く稲田氏の発表では、子どもはどのように伸びようとしているのか、授業や生活の様々な場面でとらえたエピソードから「得意なことで自信をつける A さん」「友だちとの関わりから自分の世界を広げる B さん」「頼ることを知り、穏やかに関わられるようになった E さん」等々が紹介された。これからも、子どもを見つめ、子どもへの理解を深め、丁寧に支援方法を考えて、様々なたち位置で子どもの求めに応じることで「子どもが自分らしく伸びようとする事ができる」授業や学級経営を目指したいと述べた。

(文責・東京・佐野)

### 全体討論

登壇者： 松村暢隆 奥山千鶴子 奈須正裕

コーディネータ： 佐野亮子

**全体討論の概要：**講演者の松村氏は才能教育や特別支援教育の概念や理論で用いられる「才能行動」や「不適応行動」という言葉が、奥山氏や稲田氏の実践発表で「その子がキラリとするところ」や「ちょっとクセ(苦手なこと)がある」と表現されていたことに着目した。現場で生み出される言葉は、概念の本質的な理解に役立ち、目の前の

子どもを的確にみとる(解釈する)視点になると確認できた。

全体討論では、特別支援教育の考え方を通常学級でいかす「授業のユニバーサルデザイン」や単元の学習で「独自ー相互ー独自」と個別最適な学びと協働的な学びを展開する「奈良の学習法」も紹介された。様々な方法論と併せて考えることで、



天童中部小の取り組みの特徴がより明確となった。また通底する「学習者主体」のとらえ方や、子どもが動く（学べる）状況や環境を教師はどう

作るのかについて意見交流が行われた。

（文責・東京・佐野）

## ◆こんな授業をつくってみました

### 一杯のタケノコ汁から始まる 『わたし料理遺産』探しの旅 （小3年・総合）

新潟県妙高市立妙高小学校 舘岡 真一



#### 1 タケノコ汁から生まれた疑問

妙高の人々が愛する郷土料理『タケノコ汁』。サバ缶が入っているのが特徴だ。時代を超えて食べ継がれてきた料理だが、ある疑問が生まれた。

サバ缶が一般家庭で広く食べられるようになったのは、昭和30年代。それ以前のタケノコ汁には何が入っていたのだろうか。子どもたちと調べ始めると、身欠きニシンを入れていた家庭があったことが分かった。飛行機や鉄道、トラックなどがない時代、北海道で捕られたニシンはどうやって妙高にやって来たのだろうか？社会科「町のうつりかわり」の単元と関連させ調べていった。

北海道で捕れたニシンは北前船に積みまれて直江津港に到着し、そこから北国街道を経て妙高にやって来たことが分かった。さらに明治時代中期以降は蒸気機関車が生活に必要な様々な物資を運んでいたことも分かった。子どもたちは「ニシンが北前船や蒸気機関車で運ばれてきた頃のことももっと調べたい。」と願うようになった。

#### 2 ニシンの旅をなぞって直江津へ

そこで、『ニシンの旅をなぞってみよう』と題して、直江津に出かけた。直江津は古くから廻船で栄えた港町で、今でも船絵馬やバラストとして

積み込まれた石が町に残り、当時の様子を偲ぶことができる。子どもたちは港近くに建つ琴平神社を訪ねた。石灯笼には“尾道石工〜”と刻まれていた。地図帳を見ながら、150年ほど前に遠く広島県からやって来た石灯笼が今でも大切に保全されていることに子どもたちは驚いた。

校外学習後に国語の「ミニギャラリーの解説員になろう」の単元と関連させて行った授業でAさんは琴平神社の写真に次の様な解説文を書いた。

「この神社は昔、北前船が沈まないように建てられたのです。神社は直江津の舟見公園の近くにあります。もしかしたら昔はここに北前船が来ていたのかもしれませんが。この神社を建ててこれから行く場所に、嵐が来ないように見守ってもらったのでしょうか。（中略）この神社のおかげでいろいろな品物がやって来て、ニシンをタケノコ汁に入れることができたのです。」北前船が人々の生活に深く関わっていたこと、その航海の安全を人々が願っていたことをAさんは深く理解した。多くの港町が蒸気機関車の登場で衰退していく中、大きな市場である信州を背後に有する直江津は、大正時代まで北前船と鉄道が共存できた。

直江津駅で蒸気機関車D51に体験乗車した

子どもたちは、その迫力に感動した。地域の人に蒸気機関車の思い出をアンケート調査すると、予想を超えて多くの方々からたくさんのエピソードを寄せていただいた。70代以上の方が多く、中でも90代の方が昔を懐かしんで思い出を教えてくださいとお願いしたことに私も驚いた。集まったエピソードを丁寧に読んでいくと、蒸気機関車が運んでくれた物は海産物だけでないことが分かった。

また、蒸気機関車に乗って毎日学校や会社に通った子どもの頃に、急坂をあえぐようにして上ってくるD51を応援したという思い出もあり、蒸気機関車との思い出が人々の心に強く残っていると感じた。

### 3 飯山市の池田さんが教えてくれたこと

私も子どもたちも蒸気機関車は海方面からだけ、物を運んでくれると思っていた。ところが、地域の石野さんは「冬の楽しみは信州からやって来る、ほうれん草でした。」と教えてくれた。

冬の間多くの雪が降る妙高では、野菜を育てることはできない。一方、寒くても比較的降雪が少ない信州では冬の間も野菜を育てることができる。妙高の人々は、信州のほうれん草を御馳走として心待ちにしていた。他に信州から蒸気機関車に乗ってやって来た物がないか調べているうちに飯山市の池田玲子さんに会った。池田さんからは飯山から妙高に送られた物についての情報を得られなかったが、おもしろい話を聴くことができた。飯山では“えご”が地域の宝に認定されているというのだ。“えご”とは海藻の「えご草」を使って作られるゼリーのような料理で、新潟県ではよく食べられている郷土料理である。それがどうして海のなないしかも山深い飯山の郷土料理になっているのだろうか？新たな疑問が生まれた。聴くと、新潟から魚を売りに来た行商人は、魚を入れたアルミ缶の間にクッション材としてえご草を挟んでいたのだ。それを見た飯山の人々がそのえご草を買い、各家庭で“えご”を作ったのだ。

“えご”作りには長い時間がかかる。「飯山の人々は、お盆やお正月などハレの日の御馳走として家族みんなで神様と一緒に“えご”を食べるんだよ。」と池田さんは子どもたちに教えてくれた。

### 4 料理に込められた物語 『わたし料理遺産』を選ぼう

池田さんの話を聴いた子どもたちは、「池田さんの話を聴いたら、“えご”を食べてみたいと思った。」と話した。

そこで実際にえご草から“えご”を作って食べてみた。料理には思い出や物語がある。「あなたが30年も食べたいと思う料理は何だろう。」と子どもたちに投げかけ、『料理遺産』を選ぶ活動を設定した。

私は最初、子どもたちは妙高の郷土料理を選ぶだろうと考えていて、『妙高料理遺産』という単元名をイメージしていた。ところが、Bさんが選んだ料理遺産は「ポテトサラダ」だった。日本中で食べられるポテトサラダがどうして料理遺産なのか、Bさんに聴いた。「私のおばあちゃんは遊園地の食堂でフライドポテトを売っているの。だから、家の畑で毎年たくさんジャガイモを育てているんだ。遊園地が終わって冬になるとおばあちゃんはジャガイモを無駄にしないようにカレーやシチューをよく作ってくれるの。その時にポテトサラダも作ってくれるから私の冬の御馳走はポテトサラダなの。」と教えてくれた。

この話を聴き私は単元名を『わたし料理遺産』にした。大切なのは、一人一人の子どもたちが学びの主役になることだと考えたからである。

そして「あなたたち一人一人の食べ物を教えてほしい。」と伝えた。Cさんは「私のお母さんは栃木県出身です。新潟県で結婚して、お父さんのお母さんから“のっぺ”（新潟県の郷土料理）の作り方を教えてもらいました。お母さんは、材料が多くて難しかったと言っていました。今度は私がお母さんから“のっぺ”の作り方を教えて



もらいます。だから私の料理遺産は“のっぺ”です。」と自信をもって語った。

## 5 おわりに

一杯のタケノコ汁から始まった

学びの旅は、個性豊かな『わたし料理遺産』に到着した。当たり前の中からの学習課題を見出すこと、子どもの生活経験を見つめ、一人一人を学びの主人公にすることの大切さを実感した学習だった。次はどんな学びの旅に出かけようか。

本の紹介			
<p>日本個性化教育学会会員の著書を紹介します。</p> <p>高い目標や志をもって、教育実践や研究なさっている全国の先生方をサポートする自書です。</p>			
 <p>個別最適な学び・協働的な学びの考え方・進め方</p> <p>加藤幸次 著</p> <p>「個別最適な学びと協働的な学びの一体的展開への道筋を示す。」</p>	 <p>個別最適な学びと協働的な学び</p> <p>奈須正裕 著</p> <p>「有能な学び手としての子どもの姿から突きつけられたのは、「教師は何のためにいるのか」という問いでした。」</p>	 <p>個別最適な学びの足場を組む。</p> <p>奈須正裕 著</p> <p>みんな一緒に、を手放す</p>	 <p>才能教育・2E教育概論</p> <p>松村暢隆 著</p> <p>「ギフテッドの発達多様性を活かす」</p>
<p>加藤幸次 著</p> <p>黎明書房</p> <p>2420 円</p>	<p>奈須正裕 著</p> <p>東洋館</p> <p>2200 円</p>	<p>奈須正裕 著</p> <p>教育開発研究所</p> <p>2200 円</p>	<p>松村暢隆 著</p> <p>東信堂</p> <p>3960 円</p>

◇研究会 • 各地方学会（東北、東海、関西、九州）の研究会や各会員の所属校の研究会等の情報がありましたらお知らせください。広報誌・ホームページにて会員の皆様にお知らせします。（次回会報の発行は9月中旬の予定）

◇会計 • この会の経費は、会員の会費、その他の収入で行われています。会費の年額は、団体会員 7000 円、個人会員は 4000 円です。複数年度まとめて納入することができます。

日本個性化教育学会第 15 回全国大会 2022 年 8 月 6 日・7 日 オンライン（詳細は別紙）  
テーマ 個別最適な学びと協働的な学びの考え方・進め方

事務局への問い合わせ・連絡先 庶務部長 佐久間茂和

〒362-0064 埼玉県上尾市小藪谷 77-1 3-28-502

TEL 080-5429-1681

E-mail sakuma.shigekazu@icom.zag.ne.jp



日本個性化教育学会報 第 37 号

2022 年 5 月 14 日発行

編集責任者 事務局長 奈須正裕

編 集 中 澤 米 子